

岩井克人著『経済学の宇宙』を読み直す¹

——格闘し続ける世界的経済学者の物語——

塚本恭章

Katsuhito Iwai's Keizaigaku no Ucyu (in Japanese) Reconsidered

—The Story of a world economist continuing an intellectual struggle—

Tsukamoto, Yasuaki

¹ より正確に言えば、本書は聞き手を務めた前田裕之氏との共著である。本書『経済学の宇宙』は岩井氏による新たな「補遺」—『不均衡動学』の現代版に挑む—をくわえ、2021年8月に日経ビジネス人文庫のひとつとして文庫化された。文庫版「補遺」を文庫刊行前に氏より添付ファイルにていただいたことに感謝する。『不均衡動学』は氏が主流派経済学への根源的批判をなすものとして米国留学時代から取り組んできた研究テーマであり、本稿でも述べるように、そのことによって氏は学界の「頂点」から「没落」へと転じていくこととなった。しかしながらそれは、主流派経済学とその思考様式からは捉えることができない数多くの研究分野を開拓していく可能性を氏に提供するものでもあった。

主流派の(超)新古典派マクロ経済学に内在する拭えない氏自身の「違和感」とそれにもとづく新たな「格闘」の近況報告を文庫版「補遺」から読み取りながら、ここでは10年前の次のような岩井の見解をあらためて想起しておくこととしたい。「経済学、すくなくとも主流派のマクロ経済学は、この金融危機によってまさに『危機』に陥ってしまったのである。例えばポール・クルーグマン (Krugman, 2009) は、過去30年間のマクロ経済学の発達を『良く言ったとしても、見事なほど無用、悪く言えば、確実に有害』であったと断罪している。私自身も、ミルトン・フリードマンの『自然失業率仮説』やロバート・ルーカスの『合理的期待形成理論』、さらにはエドワード・プレスコットの『実物的景気循環理論』など、1970年代以降の経済学界を支配してきた新古典派的なマクロ経済理論の『発達』は、経済学にとって大いに有害であったと考えている」。引用箇所は、岩井克人他編『金融危機とマクロ経済—資産市場の変動と金融政策・規制』東京大学出版会、2011年、257頁。

Abstract

Katsuhito Iwai is one of the most famous economists in Japan and also a world-renowned economist continuing an intellectual struggle in many academic fields.

In *Keizaigaku no Ucyu* (in Japanese) published in 2015, Iwai reviewed and discussed his own academic activities. This paper reconsiders the many of features and futures of the book, especially Iwai's own economic theory and economic analyses.

解題

本稿は、わたくしがこれまで本学図書館報『韋編』に3度寄稿した一連の内容のいわばスピノフ的な位置づけとなる文章である。

第一弾「卒業研究と本とわたし」(2018年)、第二弾「書評と本とわたし」(2019年)そして第三弾「ゼミと本とわたし」(2020年;副題には「輪読と卒論からみえる世界」が付されている)となっており、第二弾は当時の経済学部4年次生の坪島阿紀さんとの合作コラボ、第三弾は塚本ゼミ生で当時の経済学部3年次生の北川涼奈さんの文章にくわえて、岩井克人先生(東京大学名誉教授,日本学士院会員)からも「学生生活におけるゼミと卒論の意義」と題する短いながらもきわめて示唆に富む文章を寄稿していただいた。各々の年度の会報タイトルから推察できるように、「卒論(卒業研究)」「書評」「輪読」そして「ゼミ」は大学での学問的営みのコアをなすものであり、それら3つの会報すべてを通読すれば、いわゆる「大学」というものの本質の全体像を俯瞰できるように構成されている²。第二弾と第三弾の会報に本学学生もあわせて寄稿することによって、教員目線にとどまらない、学生自身

² これら3つの図書館報は愛知大学リポジトリ「図書館」から自由に閲覧可能である。2020年以降の新型コロナウイルスのパンデミックによるいわゆる〈コロナ禍〉という時代状況をふまえ、現代の大学と大学教育のあり方をめぐる問題状況について、わたくしがはじめて一文を草したのが³、以下の論説である。「岐路に立つ日本社会と大学教育—学問の危機と経済学」、『経済論集』(愛知大学経済学会)第214・215号合併号,2021年3月,71-93頁。

が実際に経験しえた肌感覚を伝えてほしいとの想いが込められている。

第三弾までの会報タイトルに即していえば、第四弾のスピノフに相当する本稿には、実際のところ「ファンと本とわたし」というタイトルを執筆者心理として付したいところだが、それは第四弾の続編にゆだねることとしよう。純粹に活字の世界と学問の世界を楽しむためには「なにか」に強い知的関心・知的好奇心をもつこと、そしてまたその「なにか」を見出すことがなにより重要であり、それは結局のところ、「なにかのファンになること」に繋がっていくはずだからである。

たとえば卒論として探究・研究してみたいテーマ、学生同士で輪読してみたい本、自分なりの着眼と表現で書評してみたい本、ゼミで勉強したい専門的内容・分野というように、経済や経済学に対する各自の興味関心をふくめて、そこにはある種の知的欲求・知的好奇心がともなっていることだろう³。人間が「ある対象」に対して主体的にもちうる「知りたい」や「研究したい」という欲求や衝動・動機、情熱そしてエネルギーは、人間を自己成長させる大きな原動力にほかならない。とりわけ新自由主義的グローバル資本主義の限界とそのゆくえ、社会主義の新たな可能性にここ数年大きな学術的関心を持ち続けているわたくし自身の場合、それらを対象にした書籍の書評をし、また学術論文も執筆してきた⁴。そうしたなかであらためて強く気付か

³ 万能の天才と称された、かのレオナルド・ダ・ヴィンチの残したノートには次のような文章があるようだ。「食欲がないのに食べると健康を害すのと同じように、欲求を伴わない勉強はむしろ記憶を損なう」。ここでの「欲求」とはまさに「知的な欲求」のことであり、それこそが学びや勉強のもっとも重要な要素であるという指摘はいわば普遍的な真理といえるだろう。当該引用は、山口周『知的戦闘力を高める独学の技法』ダイヤモンド社、2017年、148頁。

⁴ 以下で言及する山口周氏以外のいわゆる専門的研究者による注目すべき書籍として、次のようなものを挙げることができるだろう。西部忠『資本主義はどこへ向かうのか—内部化する市場と自由投資主義』NHK ブックス、2011年、水野和夫『資本主義の終焉と歴史の危機』集英社新書、2014年、ヴォルフガング・シュトレーク『時間かせぎの資本主義—いつまで危機を先送りにできるか』みすず書房、2016年、伊藤誠『資本主義の限界とオルタナティブ』岩波書店、2017年、デヴィッド・ハーヴェイ『資本主義の終焉—資本

されるのは、問題の根源的な深さであり、そもそもの問題の所在を突き止めること自体の難しさという側面である。それと同時にすぐに気付かされるのは、そうした上記の問題に挑むことが近年の現代世界においていかに重要さを増してきており、少なからず問題意識と問題関心を共有しうる論者が多く存在していることである（たとえばその一例として、独立研究者で作家の山口周『ビジネスの未来—エコノミーにヒューマニティを取り戻す』ダイヤモンド社、2020年参照。第1章「私たちはどこにいるのか?」、第2章「私たちはどこへ向かうのか?」そして第3章「私たちは何をやるのか?」という展開構成をつうじて、氏は新自由主義的資本主義や市場原理主義社会に代わり得る新たな社会ヴィジョンについての試論を積極的に描き出そうとしている。各章の「主題」をみれば分かるように、それらはいずれも容易には解答することができないものであり、それに対応して本書で活用されている「参考文献」には、経済学や哲学の古典などすぐれて現代的意義をもつ多くの学術書がふくまれている。氏の知的探求心・好奇心の深さを端的に示しているといえよう）。

さてあらためて話を戻せば、繰り返しになるが、上記のいう「ある対象」それ自体もあらかじめすでに与えられ存在しているわけではけっしてなく、各自の関心にもとづき「獲得」・「発見」していくものなのである。各自の興味関心や知的欲求・好奇心から見出される「問題発見」のほうが、実際のところ「問題解決」より難しく、より重要性があるといえるかもしれない。い

の17の矛盾とグローバル資本主義の未来』作品社、2017年、ジャコモ・コルネオ『よりよき世界へ—資本主義に代わりうる経済システムをめぐる旅』岩波書店、2018年、ウルリケ・ヘルマン『スミス・マルクス・ケインズ—よみがえる危機の処方箋』みすず書房、2020年、ジョセフ・スティグリッツ『プログレッシブ・キャピタリズム』東洋経済新報社、2020年、レベッカ・ヘンダーソン『資本主義の再構築—公正で持続可能な世界をどう実現するか』日本経済新聞出版社、2020年、諸富徹『資本主義の新しい形』岩波書店、2020年、斎藤幸平『人新世の「資本論」』集英社新書、2020年、斎藤日出治『資本主義の暴力—現代世界の破局を読む』藤原書店、2021年。岩井克人他『岩井克人「欲望の貨幣論」を語る』東洋経済新報社、2020年もその一冊に加えてよいだろう。

ずれにせよ、そういう意味でも「無関心」でいることや「無関係」を装うという姿勢は、成長の糧を逸するきわめてもったいない類のものだろう。本稿と続編では、わたくし自身が「ファン」であるところの書物の内容（およびその書物が対象とする人物）を、執筆分量と新著の発刊時期との関係上、2回にわけて紹介・論評していくことになるが、こうしたなかでみずからの「学問愛」と「テニス愛」についてもできうる限り伝えられるよう努めたいと考えている。口頭にせよ文章にせよ「なにかを伝える」ということ—ここでの文脈では主に大学生に対して—は、教員に課せられた重要な役割・使命なのだから。

＊

本稿と続編でとりあげる、日本を代表する世界的経済学者の一人として知られる岩井克人（Iwai Katsuhito；1947～）とテニスレジェンドとしてその名を知らぬものはいないスイス出身のプロテニス選手のロジャー・フェデラー（Roger Federer；1981～）⁵には、一見すればなんの「共通項」もないように思えるだろう。ただ当該人物は、上記の言葉でいう「学問愛」と「テニス愛」を圧倒的な水準で体現し続ける存在であり、みずからが従事している職業—経済学という学問とテニスという競技—を今なお究め続けている。岩井は「学問の世界」において、フェデラーは「テニスの世界」において何

⁵ ロジャー・フェデラーは自分自身ではそう呼ばないが、テニスファンのあいだではいわゆる“GOAT”（Greatest Of All Time；歴代最高ないしは史上最高）の呼び声が高い選手であることは周知の事実である。フェデラーについて書かれた伝記などの書物は諸外国で数多く出版されているが、「邦訳」されたものはきわめて少ない。わたくしは以下の本に書評を執筆し、はじめてロジャー・フェデラーについて一文を草することができた。原著が2020年の本書はフェデラーについての最新情報までも盛り込んで書かれた実に素晴らしい作品である。ジモン・グラフ著『ロジャー・フェデラー：なぜ頂点に君臨し続けられるのか』タカ大丸訳，KADOKAWA，2021年。「週刊読書人」2021年4月23日号・第3387号7面にて掲載された。書評タイトルは、「テニスを愛し続ける気高きレジェンド—その人柄・魅力・風格の〈多面的世界〉を活写」。

をどのように考え、そして成し遂げてきたのだろうか。これからの展望は何であろうか。

学者や研究者に学問や研究からの引退というものはないが（所属機関からの退職はあろう）、岩井自身が「残された時間」（氏の『経済学の宇宙』第8章表題）と述べているように、そのなかでいわゆる現役の研究者として高い知的生産能力を維持していくことはけっして容易ではない。MIT 大学院留学時代の主流派経済学研究（とりわけ経済成長理論）から主流派理論批判へと転じた後の不均衡動学の理論、貨幣論、資本主義論、法人・会社統治論、信任論、市民社会論・人間論そして経済学史など、岩井克人氏の研究はいわゆる一経済学者の研究領域をはるかに大きくこえた広大さを持ち、今なお新たな研究プロジェクトを意欲的に推進し続けている。他方、学者・研究者とは対照的にアスリートはいずれ現役選手（アクティブプレイヤー）を退いて引退する。現役のプロ選手として活躍できる期間（年数）は選手によってむろん異なるが、世界でもっともハードかつタイトなスケジュールで世界ツアーに参戦するテニス選手（とりわけ男子テニスの四大大会であるグランドスラムは5セットマッチである）のなかで、今年2021年の8月に40歳となる現役フェデラーの存在は超人的でありまさに際立っている（なお2020年シーズンのフェデラーは、年始の全豪 OP 準決勝敗退後に両膝の手術をうけたことやコロナ禍の影響が重なったこともあり、ツアーの長期欠場を表明した。くわえて21年連続出場で6度の優勝を誇る今年2021年の全豪 OP も欠場。約1年1か月ぶりにツアー復帰した2021年最初の公式戦はドーハで3月に開催されたカタル OP であった。ATP の Teniss TV にて当該試合をわたしはライブ中継で視聴したが、フェデラーの復帰を待ち望む観衆の温かい声援もくわわり、実に感動的だった。復帰初戦の YouTube 動画再生は110万回を突破している）。テニスはシーズン毎にハード、クレーそしてグラスという3つの異なるサーフェスで試合をおこなう競技だが、フェデラーは超一流のいわゆるオールラウンダーとしてどのサーフェスでも強さを発揮

できる選手にほかならない。とはいえ、岩井による上記の言葉にあるように、フェデラーもまた現役選手として確実に「残された時間」というものに直面している。

それゆえ誇張せずにいえば、各々が不屈のバイタリティとメンタリティの持ち主であり、各々には、「経済学という学問」と「テニスという競技」と格闘し、真剣勝負をし続けてきたという濃密で雄大なストーリーがあるとあってよい。それはつねに勝利と栄光に彩られているわけではけっしてなく、敗北と挫折・苦悩や葛藤にも満ちており、むしろそれらが〈一体〉となっているからこそ人々を惹きつけてやまない豊かな深みと輝き・潤いを生み出している。幾度となく遭遇したであろう逆境という名の大きな木を切り倒す斧を二人はもっているのだ。岩井は学界に支配的な新古典派経済学の理論構造とそれにもとづく自由放任主義的な資本主義論を内在的に理解することでそこに潜む矛盾を突き止め、根源的な批判をおこない、そして独自の理論彫琢に挑み続けてきた。経済学や法学を問わず、既存する主流派パラダイムへの飽くなき挑戦である。ウィンブルドンに制しその後芝の王者として君臨したフェデラーは、当時新鋭として出現し急成長を遂げつつあったラファエル・ナダルという赤土の王者に挑戦し続け、そして二人は永遠のライバル・盟友となっていく⁶。発見と挑戦、さらに再発見と再挑戦の日々の連続のなか

⁶ スポーツライターとして活躍する山口奈緒美氏による以下の文章を参照されたい。巻頭を飾るニュースのキーパーソン (vol. 146) 「ロジャー・フェデラー (27歳) プロテニスプレーヤー」についての『『最強の王者』が復活—冷静さの陰にある情熱と苦悩』(日経ビジネスアソシエ 8 (17), 4-6頁, 2009年8月18日号所収)。2009年は、ロジャー・フェデラーが男子テニス界において新たな歴史的偉業を成し遂げたきわめて重要な年であった。全仏オープンをはじめ制しての生涯=キャリアグランドスラム達成(四大大会の全豪, 全仏, ウィンブルドンそして全米オープンのすべてで優勝), そしてその年のウィンブルドンで6度目の優勝をし、元テニス王者のピート・サンブラスのグランドスラム優勝回数14を「15回」へと更新した。山口氏は上記の文章で次のように綴っている。ロジャー・フェデラーは「偉業を達成するまでのこの1年, 何度も苦い涙を流してきた。昨年の全仏オープン決勝では, ライバル, ラファエル・ナダルに歯が立たず, 3年連続で敗北。6連覇を目指したウィンブルドンのトロフィーまで奪われ, 2004年2月から守り続けてきた

で常に生き抜いていること、おそらくこれはこの二人にかぎらず、人々に強い影響力を与えることができる人間すべてが持ち合わせている特質なのではないか。憧れと敬意のルーツといってもよいだろう。

さらに追加的に言及しておけば、フェデラーという超一流アスリートがたえず体现している価値観の根源は「スイスのなもの」そのものであるといわれており、試合の決定的な要所において、英語の“Come on”でなく、母国語であるスイスドイツ語の“Chum Jetzt”（さあ来い！ という意味）と彼は雄叫びをあげながらみずからのプレーを鼓舞し、真剣勝負のギアを加速させている。瞬時に放たれるアスリート特有の闘争本能の発露は母国語と分かち難く結びついているようだ。同じく興味を惹かれるのは、岩井が2009年にセルビアのベオグラード大学創立二百年記念式典に招かれ同大学の名誉博士号を授与されたときのエピソードを綴った文章のなかで、米国から帰国した際に自分の母国語である日本語で四六時中思考できるという解放感を味わったと明言していることであり、そこには「言語と思考が表裏一体の関係にあるという、私自身がそれまで抱いてきた信念」があるともいう。グローバル・ランゲージの英語ではない「母国語の大切さ」が両氏によって表明されている。

*

以下で取り上げる『経済学の宇宙』のなかで岩井は、「学者とは、解かな

世界ランキング1位の座から引きずり下ろされた。そして決意を新たに臨んだ年初の全豪オープンまで……。勝って当然のプレッシャー。みずから『モンスター』と呼んだ重圧を乗り越え、王者は帰ってきた」。この文章が書かれた2009年から12年を経た現在の2021年においてもフェデラーは世界ランキングトップ10内に位置し、グランドスラムタイトルも2009年の15回から現在の「20回」にまで更新され続けている（この20回という数字はライバルであり盟友でもあるラファエル・ナダル、そしてノバク・ジョコビッチとならんで歴代最多タイの記録）。そしてその更新記録のなかには、ウィンブルドンで歴代最多優勝を誇る8度目の優勝をオープン化以降最年長の35歳342日にて実現した快挙（2017年）も含まれている。

けれどもならない学問的な問題に従属している存在なのです」と述べているが、これをフェデラーのコンテキストでいえば、「選手・アスリートとは、試合に勝つために鍛えなければならない技術的・肉体的・精神的な問題に従属している存在なのです」となるだろうか。いずれにせよ、経済学者である岩井克人もテニス選手であるロジャー・フェデラーも、わたくしには学問と

テニスの世界におけるきわめて魅力的な「表現者」であり、一言でいうならば、彼らの「ファン」なのだ。学問とテニスの世界をめぐる二人の「物語」の特徴と風味を、二人の「本」をつうじて描き出してみたい（なおフェデラーについて語る場合、すでに触れられたように、彼の永遠のライバルで盟友でもあるスペイン人選手のラファエル・ナダルというもう一人の偉大なテニスレジェンドの存在が欠かせない。ナダルにはすでに「自



ロジャー・フェデラー（右）と
ラファエル・ナダル（左）
愛知大学 OG・坪島阿紀さん作 2021年2月21日

伝」があるため、両者の関係上、続編でフェデラーを取り上げる際にはナダルの自伝についても一冊として紹介することとしたい。「ファン」である「わたし」を結びつける媒体として「本」があり、そうした営みをつうじて、何らかのわたくし自身を自己認識（セルフアウェアネス）できうるだろう。

2020年以降の新型コロナウイルスのパンデミックによるコロナ禍のなか、これまでの大学教育のあり方は大きな変容を余儀なくされてきている（吉見[2020]；[2021]）。対面授業と遠隔（オンライン）授業のハイブリッド化が

加速し、現時点では前者に代わって後者がメインとなりつつある。いわば2つの異なる世界を行き来する行動変容にわれわれは直面しており、こうしたリアルとバーチャルのせめぎ合いは大学教育に限らず、それ以外のさまざまな職種にも甚大な影響を及ぼし、人々の働き方や暮らし方の根源的な見直しを迫るものとなってきている。とはいえ、対面と遠隔という授業の「形態」がこれからいかなるバランスになろうとも、大学教育というものの「本質」は変わらないのではなかろうか。いや、端的に言えば、変わるべきではないのではないか。繰り返して述べてきた、上記でいうところの知的欲求や知的好奇心から探究したいみずからの「テーマ」を見出し、論理（ロジック）と事実（ファクト）にもとづいて、独自の「解」を導いていく。既存（基本）をふまえ既存をこえる独自の「解」を析出しうるためには継続的で批判的な思考力が必要だ。「勉強」と似ているようで違う「研究」というものがそこにあり、大学とはそうした力を涵養する場所にほかならない。一言でいえばイノベーションである。それは身近なところにあり、意識次第で実現可能だ。そのことに「気付く」ことが最初の一步となろう。

本稿は「書評論文」な体裁をもつ論説として公表するため、本来の論説で必要とされる章・節タイトルなどの小見出しはあえて割愛することとした。そして第四弾の位置づけとなるスピノフ作の本稿と続編「ファンと本とわたし—愛され続けるテニスレジェンドの物語」が、第一弾から第三弾までの学問・学術上の内容（卒業研究、輪読・書評やゼミ）とよい相乗効果を発揮しながら、各々の内容の「新たな組み合わせ」が「新たな付加価値」を生み出せるよう臨みたい（なお本稿本文での括弧による挿入文章は断りが無い限り、『経済学の宇宙』からの「引用」である）。

○岩井克人『経済学の宇宙』（聞き手=前田裕之）
（日本経済新聞出版社、2015年）

一経済学者の克明なる思想史 粘り強い主流派批判から独自の理論彫琢へ

人間が知的で豊かな生活を営んでいくうえで、〈本・書物〉の存在はいうまでもなく欠かせない。研究者である以上、みずからの専門分野の入門書や専門書、専門的論文などに目を通し、学術論文を書き続けることはいわば職業的作業の一環である。とはいえ、学術論文を書くためであるという理由をこえて、何度も何度も読み返したくなるような本の存在は概して少ないのではないだろうか。そしてそのような書物にめぐり合うことも意外と難しいのかもしれない。人間は人間から影響を受ける生き物だが、書物からもまたしかりだろう。わたくしにとってそのような本を象徴するものが、岩井克人氏の『経済学の宇宙』である⁷。



*

経済学という一専門分野をこえて広く知られているように、著者の岩井克人氏は『不均衡動学の理論』（1987年；英語版1981年）、『ヴェニス商人の資本論』（1985年）、『貨幣論』（1993年）、『二十一世紀の資本主義論』（2000年）、『会社はこれからどうなるのか』（2003年）、『会社はだれのものか』

⁷ 本書については、「週刊読書人」や『現代思想』、そして『情況』の各媒体ですでにこれまで書評・紹介してきたが、本稿のために全面的に改稿されている。本学『韋編』における、図書館委員の「教員から学生への推薦図書」として最初に取り上げたのも本書であった。

(2005年)そして『資本主義から市民主義へ』(2006年)など、多分野に及ぶ理論研究で精力的に活躍し続ける世界的経済学者の一人である。『経済学の宇宙』は2015年の刊行だが、それ以降も共著『資本主義と倫理—分断社会をこえて』(2019年)、『岩井克人「欲望の貨幣論」を語る』(2020年)などの著作がある⁸。

本年2021年の年始に刊行された鶴原徹也編『自由の限界—世界の知性21人が問う国家と民主主義』(中公新書ラクレ)には、エマニュエル・トッド、ジャック・アタリ、ジョセフ・スティグリッツ、ユヴァル・ノア・ハラリ、マルクス・ガブリエルらとともに、唯一の日本人知性を代表する論客として岩井克人氏は登場しているが、私信にて氏は「それは日本の知性の貧困を示しているのかもしれませんが」と告げられた。日本人が自分一人しか名を連ねていないという事実、くわえて氏のいうところの〈知性〉がかりに一専門分野をこえた領域横断的ないわゆるリベラルアーツ的な力量を含意するものであるならば、本書『経済学の宇宙』においては紛れもなく〈知の厚み〉と〈知の深み〉そして〈知の拡がり〉が一体となって鮮やかに響き合っている⁹。そして氏自身の克明なる学問的遍歴を綴った(いや「語った」というべ

⁸ 共著『資本主義と倫理—分断社会をこえて』に所収されている論稿タイトルは、「経済の中に倫理を見出す—資本主義の新しい形と伝統芸能」。これは、岩井が2016年に文化功労者に選出された際、勤務校の国際基督教大学でおこなわれた顕彰記念講演タイトルでもある。『岩井克人「欲望の貨幣論」を語る』は、NHK・BS1にて2019年7月14日に放送された「欲望の資本主義：特別編—欲望の貨幣論2019」にもとづく作品である。これら2つの著書に対していずれもわたくしは「週刊読書人」にて書評を執筆している。書評タイトルや当該書評の掲載号などについての詳細は、わたくしの本学HPの研究者情報データベースを参照されたい。

⁹ 岩井の本書の第1章「生い立ち—『凶鑑』から経済学へ」からもあきらかなように、氏は筋金入りの読書人であり、読書の達人である。多くの文学作品に通読している氏は、次のようなきわめて印象的な見識を示しているので引用しておきたい。「若い頃に文学作品をたくさん読んでおいてよかったのは、世間を驚かすために書かれた作品や主義主張のために書かれた作品は、一時的には大きな読者を獲得することがあっても、結局は残らないということが分かったことです。もちろん、読者がいなければ、文学作品は文学作品ではありません。だが、文学作品の作者が本当に向き合わなければならないのは、究極的には

きだろう) 500頁近い本書を丹念に読み進めていくと、まさにえもいわれぬ〈知的高揚感〉を体感できる。エコノミストが選抜する2015年度の経済書ベスト1の作品であり、2015年刊行以降も版を重ね、読み継がれている(第1刷が2015年4月24日、2016年2月15日には第9刷になっている)。

長きに及んで岩井氏と深い知的交流があった二人の世界的経済学者の自伝である、青木昌彦『私の履歴書—人生越境ゲーム』(2008年)や宇沢弘文『経済と人間の旅』(2014年)とも表題上のニュアンスに親近性が感じられるように、『経済学の宇宙』という深遠なるタイトルがすでに読者諸氏の想像力を誘発し、本書が「岩井克人の思想史」の決定版である(本書のまえがき)という、共著者であり聞き手を務められた前田裕之氏の見解もあるからだろうか。学問と研究をめぐるひとつひとつの思索の深化のプロセスがこれだけ綿密に辿られ、そしてまた、それらが有機的に繋がりがらいわば雄大な山脈を構築している。学問としての経済学のもつ魅力・迫力と潜勢力というものについて、本書のなかで岩井はきわめて純真かつ明快に語り直している。容易に読破しうる書ではないとはいえ、経済学を学びたい(ないしは学び直したい)という幅広い世代の読者層にぜひとも届けたい力作といえるだろう。

当該書評タイトルの「一経済学者」は文字通り「一人の経済学者」という意味だが、そこには「唯一の経済学者」という含みも暗に込められている。氏の学問遍歴とそれにとまなう経済(学)をめぐる思想変遷が色彩に富む多面性をもつ以上、本書の特徴もまた複数の観点から捉えることができよう。少なくとも以下の3つの側面が着眼に値する¹⁰。

読者ではなく、作品それ自体なのです。良い作品には、作者自身の意図を超えた、作品としての必然性がある。その必然性を具体的な形にすることに、作者が全身全霊をかけて書くということです」(22-23頁)。

¹⁰ 当該「論説」は、『経済学の宇宙』で詳細に語られている岩井氏の学問の世界における格闘とその知的遍歴の多面的特徴について論及するものであり、氏自身の研究テーマの内容とその成果を「解説」するものではない。ただとりわけ以下の5点につき、各脚注でや

*

1つは、自分史と時代史の複雑な絡み合いを背景に、自己の新たな学問上の課題をたえず「発見」ないしは「再発見」していく知的精神を〈思想をめぐる格闘史〉として描き出した側面であろう。学問の起点が「問題の解決」よりむしろ「問題の発見」にあることをあらためて強く教示してくれる。氏がアメリカ MIT に留学した1969年はそれまで優勢だった、マクロ経済学としてのケインズ経済学とミクロ経済学としての一般均衡理論（価格理論）の二本立てによって経済学を構成するといういわゆるサムエルソン流の「新古典派総合」への批判が顕在化し、時代の変転とあわせ経済学の未来が岐路に立たされていた時期であった（第2章）。ケインズ革命に対する「新古典派経済学による反革命」がシカゴ大学のミルトン・フリードマンらによって主導的に牽引されていたのである。のちにノーベル経済学賞を当該分野への貢献で受賞するロバート・ソローが推奨する経済成長理論の研究を断り、ケインズの有効需要原理とヴィクセル的不均衡累積過程理論との有機的統合をめざす「不均衡動学 (Disequilibrium Dynamics)」の構築は、そうした反革命が吹き荒れる嵐の時代の様相を直視しながら、既存する支配的な主流派経済学への根源的批判というタフなフィジカルとメンタリティを要する作業にほかならず、岩井自身の果敢な挑戦と苦悩を象徴する営みといえるだろう（第3章）。7年という完成年月以上に、かつての自分を「傲慢だった」と幾

や詳細な概説をおこなっている。こうした特徴的論点のいくつかは、本稿の脚注2で触れた、現代の大学と大学教育のあり方をめぐるわたくしの続編の論説においてさらに考察を深めるべき主題となるであろう。1) 対立する2つの資本主義論と〈投機〉及び〈合理性〉概念との関連、2) ヴィクセル・ケインズの不均衡動学とシュンペーター経済動学との関係（資本主義経済に固有かつ根源的な不安定性をめぐるケインズとシュンペーターによる各々の経済理論の意義とその射程）、3) 人間・倫理・信任というものをめぐる岩井と宇沢、4) 岩井の法人論・会社統治論そして信任論の特質、5) 経済学史の存在意義とそれにもとづくアプローチの潜在力。

度も振り返る氏の心境には、既存超えへの自信と実力を育み高めていった反面、その先に聳え立つ壁という名の混迷と挫折を予期していたようにも思われ、その二重性が感慨深い。師である宇沢弘文先生が終生抱えることとなった「宇沢問題／精神」を岩井は引き継いだわけだ¹¹。

第1章で岩井は次のように表明している。「解かなければならない問題は、個々の学者を超えたところに存在し、それを見いだすことが最も大切なこと

¹¹ 宇沢弘文（1928-2014）について、岩井は本書のなかで次のように述べている。「先生はみずからの新古典派的分析手法と、正義感にもとづく新古典派批判という目的との間のギャップで、長らく葛藤していたのだと思います。……そして、そのことは、私の意識の底に残り、その後の私の研究姿勢に大きな影響を与えることになったのです」（第2章、49頁）。宇沢弘文について最近刊行された本格的評伝として、佐々木〔2019〕を推奨しておきたい。

岩井による宇沢追悼文によれば、「暖かい心」と葛藤していた宇沢の「冷徹な頭脳」がいかなる結実をなしたのかということをめぐる、いわゆる後期宇沢が集中的に取り組むこととなった「社会的共通資本（Social Common Capital）」に関する一連の諸研究に対し、岩井は「いささか失望します」という。そしてそれは新古典派経済学の枠内にとどまるものであり、新古典派のいう「ストックとしての公共財と言い換えてもいい」と岩井は続ける。宇沢の「社会的共通資本」についての岩井の当該見解についてはその後「さまざまな反応」があったようだが、ここではそれには言及しない。ここで注目しておきたいのは、「社会的共通資本」を論じた宇沢の文章のなかには、岩井の現時点の主要研究テーマのひとつをなす「信頼関係論」でコアとなるキー概念（＝信任）が登場しており、宇沢の「社会的共通資本」の理論と岩井の「信頼関係」の理論が根底的には共通する思想をもちうるのではないかという理解についてだ。これからの〈経済学の未来〉および〈資本主義の未来〉を捉え直す意味でもまた、「人間」、「倫理」そして「信任」への着眼はきわめて重要な意義をもちうるであろう。

宇沢が2000年に刊行した『社会的共通資本』（岩波書店）には、次のような文章が記載されている。自然環境（自然資本）、社会的インフラストラクチャー（社会資本）そして制度資本からなる「社会的共通資本は、それぞれの分野における職業的専門家によって、専門的知見にもとづき、職業的規律にしたがって管理、運営されるものであるということである。社会的共通資本の管理、運営は決して、政治によって規定された基準ないしはルール、あるいは市場の基準にしたがっておこなわれるものではない。この原則は、社会的共通資本の問題を考えると、基本的重要性をもつ。社会的共通資本の管理、運営はフィデューシアリー（fiduciary）の原則にもとづいて、信託されているからである」（第1章、22-23頁、強調は塚本）。本稿の「脚注10」とともに、岩井の宇沢弘文追悼文もあわせて参照されたい。「故宇沢弘文先生が目指したもの—『冷徹な頭脳』より『暖かい心』」日本経済新聞朝刊、2014年9月29日掲載。

です。学者とは、解かなければならない学問的な問題に従属している存在なのです。氏による貨幣の「自己循環論法理論」は、既存の「貨幣商品説」と「貨幣法制説」のいずれをも棄却し、いわゆるマルクス「価値形態論」を読み抜き、独自の「貨幣」論を展開したものとして知られる（第5章）¹²。日本と米国を行き来するなかで新たに「発見」されたのは、現在の主たる研究テーマとしての法人論争における「法人名目説」と「法人実在説」を有機的に統合する「法人」論や「会社統治」論、「信任」論の展開だ（第6・7章）。既存の主流派学説を消化し乗り越えようとするこれらの挑戦自体が氏の言葉

¹² 岩井貨幣論によれば、一万円が一万円としての価値をもつのは、他人に一万円の価値をもつ貨幣として受け取られるということがいわゆる「予想の無限の連鎖」をつうじてその価値が支えられているからであり、したがって、「貨幣は貨幣として使われるから貨幣である」という自己循環論法にもとづいている。貨幣の自己循環論法理論とは、経済の実体的構造（人々の欲求）や外部の超越的な権力の介入によらず、そうした要因からは独立して貨幣の貨幣としての価値を支える存立構造をあきらかにするものにほかならない。貨幣によって存立させられている資本主義経済は、そうした「予想の無限の連鎖」が崩壊するときこそ「真の危機」に直面するのであり、岩井氏によれば、それは恐慌ではなくハイパーインフレーション（＝資本主義経済そのものの解体）であるとみなされることとなる。なお岩井貨幣論に対する現代的批判の試みとして西部 [2014] があるが、岩井と西部の「貨幣」に対する理論的理解とその実践的帰結の相違を生み出しているもっとも重要な要因のひとつは、ハイエクによる『貨幣の脱国営化論』（1976年）に対する両氏の評価に関わっている。のちの脚注でも論及するように、岩井によれば、貨幣も資本主義もまさに純粋に形式的な論理—実体的根拠のないものが力をもつというところの自己循環論法—にもとづいて動いている以上、グローバル通貨やグローバル資本主義に対抗しうる唯一の対抗原理は純粋に形式的な論理（＝倫理）であるとし、コミュニタリアニズムや西部氏がグローバル化の対抗原理としてとりわけ重要視する地域通貨は限定的な効果しか持ちえないと批判的である。西部氏の貨幣論にもとづく岩井貨幣論批判をここで詳しく展開する余裕はないが、簡潔に西部氏の「主張」を引用しておきたい。「岩井氏の議論は『無限』と『予想』という概念に基本的に依拠するものであり、また、人間の『合理性』を暗黙的に前提としています。岩井氏の『予想の無限の連鎖』は、『観念の自己実現』の二つのあり方のうち、未来へ向けての『予想の自己実現』に相当するものですから、それは『貨幣という謎』のせいぜい半分を明らかにするにすぎない」（同上書、250頁）。さらに氏によれば、「貨幣について、人間の合理性にもとづく無限の予想だけから貨幣をとらえないこと、単一貨幣の世界を想定しないこと、多様な貨幣が共存しながら質をめぐる競争をすることで貨幣が進化することを論じる点で、岩井『貨幣論』と異なるのです」（同上書、251頁）。

を見事に証明している。

少し迂回的に述べておけば、氏は、近代経済学とマルクス経済学の双方に共通しうる「経済学的思考」というものについてかつて論及し、とりわけ日本で近代経済学と呼称される新古典派経済学は、プラトン以降の西欧形而上学のもっとも典型的な表現と称する当該思考を忠実に理論化したミニチュアであるとみなしていた（岩井 [1985]）。

アダム・スミスが導入した一組の対立概念である「自然価格」と「市場価格」はその後のリカードの古典派経済学にも明確に引き継がれ、マルクスはスミスとリカードの「自然価格」を「生産価格」という概念をつうじて再現した。限界革命後のメンガー、ジェヴォンズそしてワルラスの新古典派経済学の創始者らは、古典派とマルクス派による上記の対立概念を「均衡価格」と「不均衡価格」という形で呼称する。こうして氏によれば、自然価格や労働価値ないしは生産価格、均衡価格は、「経済の『純粹』的・『実体』的・『本質』的・『自然』的な……すなわちその『真実』の姿を表現するものと規定する」という第一義的な役割を担うものとして認識されており、それとは対照的に、市場価格ないしは不均衡価格はまさに二義的かつ副次的なものに過ぎないのであり、「経済の『不純』的・『仮象』的・『偶然』的・『人為』的……すなわちその『誤謬』の形態とみなされる」こととなる。したがってまさに岩井のいう「経済学的思考」とは、「市場経済の自己調整的作用が純粹に働いているときに平均的に達成される状態を経済の『真実』の姿として規定し、現実の経済状態をこの『真実』の姿からの乖離の度合いによってすべて一次元的に位階づけること」にほかならず、主流派としての新古典派経済学を強固に支配し続けているそうした「経済学的思考」から脱却しうる経済学の新たな思考の可能性とその方法論上の基礎を再構築することが、氏自身が見出した「挑戦」の始発点となる。さらにくわえていえば、実際のところすでに新古典派経済学（ないしはマルクス経済学）という経済学の言説それ自体のなかに当該思考を変質ないしは解体させうる「異質」なる思考が存在

し、氏はそれこそ「貨幣をめぐる思考」であり、「貨幣経済に本源的な不均衡についての思考」であると表明している。

主流派である新古典派経済学の理論構造を内在的に「理解」することではじめてそれへの有効な「批判」も可能となるが、フリードマンの「自然失業率」理論にせよ、ロバート・ルーカスやトーマス・サージェントの「合理的予想形成仮説」にせよ、あるいはエドワード・プレスコットの「実物的景気循環（リアルビジネスサイクル）理論」にせよ、氏によれば、それらは徹底的な「均衡理論」にほかならず、ケインズのいう非自発的失業なる概念はあらかじめ排除されている。そのことはまた、それらの諸理論はセー法則が成立することによって総需要と総供給が常に一致する物々交換経済を想定するものであり、そのセー法則を棄却して、正真正銘の貨幣的市場経済である資本主義経済についての理論構築をめざしたケインズ有効需要原理とは本質的に相容れない基本性格をもつということだ。では、氏のいう「ケインズ経済学の最も深遠な命題」とは何を意味するのだろうか。それは、「現実の資本主義経済が、ある程度の安定性を保っているのは、貨幣賃金の硬直性や資本移動の規制、あるいは政府や中央銀行によるマクロ政策など、価格の自由な動きを阻害する『市場の不完全性』がそこに存在しているからである」というものであり、類似する別の文章でいえば、「資本主義経済とは、市場に対抗する『不純物』の存在によって、『絶望する理由も満足する理由もないような中途半端な』安定性を、まがりなりにも達成してきたということ」にほかならない。不均衡動学が論証した、「均衡理論」的なケインズ理論と「不均衡理論」的なヴィクセル理論の有機的統合とは、とりわけケインズ自身がその重要性を悟っていた貨幣賃金の硬直性という「不純物」ないしは「市場の不完全性」が存在することによって、現実の資本主義経済はヴィクセル的不均衡累積過程理論が描き出す不安定な世界の支配から免れ、ケインズのいう一定程度の安定性を保持することが可能になっているということなのである。ゆえに貨幣賃金の硬直性という「不純物」の存在は、ケインズ

の言葉にあるように、まさに「幸いにしてそう」なのであり、「幸運なことである」わけだ。ふたたび岩井自身の言葉を用いるならば、「貨幣賃金が硬直化した世界においては、『不均衡理論』的なヴィクセル理論は背景に退き、『均衡理論』的なケインズの『有効需要原理』が支配することになります」。

労働力の価格である貨幣賃金が他の財やサービス同様に伸縮的であることによって、アダム・スミスの「見えざる手」が指し示す新古典派の予定調和的な理想状態—市場の自己完結性ないしは自己秩序性—に到達するのであれば、ケインズ「一般理論」自体がむしろ新古典派の「特殊理論」として位置づけられてしまうであろう。ケインズ理論へのフリードマンら「新古典派経済学の反革命」に対するいわば反革命と称してもよい岩井の理論的挑戦は、こうして主流派の新古典派経済学が想定する「効率性と安定性の同時実現」と真っ向から対峙し、効率性と安定性の二律背反という「資本主義の不都合な真実」が不均衡動学研究のきわめて重要な理論的帰結として洞察されていく。そして氏は、2008年のリーマン・ショック後に「自由放任主義の第二の終焉」という論文も公刊し¹³、初期の理論研究に回帰する。当該論文においては、ケインズの「美人投票」投機論と貨幣の「自己循環論法」理論をふまえ、資本主義経済の真の危機の内実をあらためて論じ直しマクロ経済学の再構築を試みている（ただし、本書では「投機」についての言及がまったくないのは実に不思議である。すで



¹³ 日本経済新聞朝刊の2008年10月24日号に掲載の「自由放任は第二の終焉—『貨幣』の不安定性露呈」は、よりコンパクトかつ明快に氏の主張のエッセンスが論じられている。

に言及しておいた『岩井克人「欲望の貨幣論」を語る』第3章では、貨幣はもっとも純粋な投機であると論じられている¹⁴。『不均衡動学』を仕上げた

¹⁴ 岩井氏本人はこの点を指摘した、『経済学の宇宙』に対するわたくしのかつての書評に対して謝意を示された。なお別の著書で氏は「投機」についてこう述べてもいる。「いま投機はわれわれの生きている経済をこれだけ不安定にしているんだけど、同時にこの投機はけっして消してはいけない行為でもあるのです。われわれの経済、いや人間性の本質に根ざしている」（岩井 [2006] 33頁）。そして『岩井克人「欲望の貨幣論」を語る』（2020年）では、スミスからフリードマンにつらなる〈新古典派的な資本主義論〉と、ジョン・ローからヴィクセル、ケインズそして岩井自身へ引き継がれる〈不均衡動学派的な資本主義論〉という根源的に対立する「2つの資本主義論」の特徴が明快かつ構造的に再整理されている。氏によれば、リーマン・ショックとしての2008年の世界金融危機はこの2つの資本主義論の対立に「決着」をつけるものであった（新古典派的な資本主義観にもとづく壮大な実験の壮大な失敗）。とはいえ、経済危機という「現実」から直截的に対立の決着という判断がなされたのではむしろない。

いわゆる不均衡動学派のケインズと新古典派のフリードマンを対峙させたとき、そこには〈投機〉と〈合理性〉をめぐる根源的な「理論」上の対立があり、いうまでもなく、氏はケインズの理論に軍配を上げている。スミスの経済思想を投機的市場にまで究極的に推し進め、投機こそ市場を安定化させると説くフリードマンの安定的投機論は、「実に巧妙な議論」であり、「天才的であるといってもよい」が、それは牧歌的な投機を想定したものにすぎない。まったく対照的に、ケインズの「美人コンテスト」投機論は、プロの投機家が高次の段階への絶えざる予想をもとにしたのぎを削り合う金融市場のモデルを抽出しており、それはまさに「個人の合理性の追求が社会全体の非合理性を生み出してしまう」という〈合理性の逆説〉を表明している。フリードマンのいう「非合理性」でなくケインズのいう「合理性」こそが、資本主義に固有かつ本質的な不安定性を増大させるのだ。〈本質的〉であるがゆえにそこから完全には免れることはできない。さらに氏によれば、そもそも貨幣こそこの世に存在する「もっとも純粋な投機」にほかならず、それはまた、人々に時間的・空間的制約をこえた売買の「自由」を与えうるものでもある。まさにマルクスのいうところの「貨幣はレヴェラーズ」だ。だが貨幣が純粋投機であるがゆえに、そして売買の時間的・空間的な切り離しは新古典派が依拠するセー法則を破綻させ、マクロ的不均衡をもたらす。貨幣によって存立させられている資本主義経済は本質的な不安定性を必然的に内包するシステムであり、恐慌やハイパーインフレを引き起こす理論的可能性を常にもつこととなる。フリードマンが「新古典派による反革命」としてとりわけ1980年代以降に唱道してきた自由放任主義的な資本主義は理論的な誤謬にほかならず、それゆえ岩井によれば、「自由を守るためには、自由放任主義思想と決別しなくてはならない」。

そして本書の終盤では、純粋に自由放任主義的な資本主義の危機と限界がグローバルな規模で露呈してきている現代世界において、各経済主体の自己利益追求を許容する資本主義の自由は保持し、他方で環境破壊や格差再拡大・金融危機など資本主義の暴走を抑止しうる「資本主義の新たな形」が、カントの道徳律に回帰しながら模索されている（なお

エール大学での知己でありノーベル賞学者トービンの言葉、「カツ、おまえの仕事は、時代を二十年先駆けている」は今どんな響きをもつのであろうか。

2つめは、岩井経済学の形成と展開という長き道のりのなかで築きあげられてきた〈多様な人間との知的交流史〉としての側面であろう。経済学者関係に限ってみても、米国留学時代のサムエルソン、ソロー、トービン、クープマンズら偉大なる師はもちろん、新古典派をめぐる「頭脳と心情とのギャップ」に悩み続けた宇沢弘文や「通説批判」から日本経済についての実証・政策論争に精通する小宮隆太郎、近代経済学「名講義」の根岸隆の各先生（各先生の自伝も参照されたい）。先輩筋にあたるスタンフォード大学名誉教授の故青木昌彦氏や終生の友人である奥野正寛と石川経夫の両氏など。51歳の若さで他界した「石川君の死」のなかで紹介される弔辞は、読者の心に痛いほど響くだろう。石川経夫氏が教育や研究・大学行政などあらゆる

これらの論点は『資本主義と倫理—分断社会をこえて』に所収されている岩井論文でも考察されている。もっとも単純な原理としての算術のみで動いている（たとえば「引き算」がそれに該当し、収入から費用を差し引いた利潤がプラスであれば追加投資、マイナスであれば資金や資源の回収・撤退という意思決定がなされる）資本主義だからこそまに普遍化する力を秘めており、そしてまたグローバル化する必然性があるのだ。したがって氏によれば、資本主義に対抗しうするためにはできうる限り〈普遍的な原理〉で対抗しなければならないのであり、岩井氏自身は資本主義に対抗すべく普遍性をもちうるという「信任関係」論の意義とその潜勢力を強調している。それはまた、師である故宇沢弘文の「社会的共通資本」の理論とも思想的に響き合う豊かな内実をもつものとして理解できると考えられる。当該脚注での以上の文章は、『岩井克人「欲望の貨幣論」を語る』へのわたくし自身の書評に大きく依拠している。くわえてここ近年のインタビュー記事と論考をつうじて、これからの資本主義に対する氏の提言をコンパクトにうかがい知ることのできるだろう。岩井克人「現実の世界で再演された資本主義の不安定性」、『週刊エコノミスト』2019年4月30日・5月7日合併号、84-85頁、「資本主義に未来はあるか—持続可能な資本主義は実現できる」、『週刊東洋経済』2021年4月10日号、40-42頁、「変質する資本主義、変貌する会社」、『Voice』2021年5月号（第521号）、94-101頁、そして日本経済新聞出版社から2021年6月に刊行された新刊書『逆境の資本主義—格差、気候変動そしてコロナ……』に所収されている「ドル危機後、デジタル国際共通通貨が軸に」、140-144頁。

面においていつもきわめて誠実かつ他の誰よりも熱心に取り組む人柄の人間であったとし、「本当に君ほど、人からもらう以上に与えようとした人間を、知らないのです」と岩井はいう。そしてさらに言葉を紡ぎ、「君の与えてくれたものを君には返せない。だから、僕たちはそれを世の中に返すしかないのです」。本書全体をつうじて記述されている岩井克人の「人脈」、それはあたかも歴史上の偉人（アリストテレス、シェークスピア、マルクスやケインズ、シュンペーター）らとの「対話」をも想像させてくれないだろうか。テキスト解釈からもたらされるこうした人脈の域も、氏の自信と実力の軌跡とあわせ、本書の醍醐味であるにちがいない。

*

経済学の歴史を総括し、反省するという作業はけっして容易でない。しかしそれによってこそ学問の新たな未来と展望が切り拓かれる。それゆえ、いわば〈経済学（史）の未来〉ともいうべき3つめの側面が本書全体をつうじて浮かび上がることを見落としてはならない。

そうした研究テーマの全体像は、終章の第8章の表題が「残された時間」と付されているように、氏の研究者人生の集大成としての意味合いもくわわり、なんともいえずスリリングだ。これまでも言及してきたように、経済学という学問の一専門分野にとどまらない多分野への「越境」的挑戦に、氏はこれまでたえず逡巡・後悔しながらもゆっくりと時間をかけ、きわめて粘り強く思索を続けてきた。法人論や信任論研究はその象徴であり¹⁵、米国から

¹⁵ いわゆる「法人」を発見した岩井によれば、「法人とは、本来はヒトではないのに、法律上ヒトとして扱われるモノである」のであり、法人とはまさにヒト性とモノ性という両義性をかねそなえた不思議な存在にほかならない。ここから「単なる企業の平屋建て構造」と「法人」である「企業（法人企業）」としての「会社」の「二階建て構造」とを明確に区分し、法人論争に1つの明確な「決着」をつけると氏がいうところの「会社の二階建て構造」論を完成させていくこととなる。それは欧米主流派に支配的ないわゆる株主主権論を否定し、私有財産制にもとづく資本主義社会の経済活動において中核をなす会社（＝

帰国後に新たな研究プログラムのひとつとして設定した「貨幣論」研究についても、氏がまとめあげた「貨幣の進化」の英語論文（最終バージョンの題名は「貨幣の自己循環論法理論」）の出版をめぐって幾多の紆余曲折があ

法人企業）が一階と二階という重層的な二重の所有関係を活用した仕組みであることをも再確認しながら、会社というシステムが本質的にもつ多様性—たとえば営利法人と非営利法人という「形」および各法人が掲げる「目的」の多様性—の理論的根拠を示すものであったといえるだろう。くわえて氏は、日本経済新聞連載の日本語エッセイ「ヒト、モノ、法人」論を学界のルールにそくして英文論文に仕上げて世に問う作業にも挑んでいく（なお氏によれば、当該英語論文は1994年から書き始め、最初の原稿完成は3年後の97年、そのとき岩井は50歳になっていた。最終的にアメリカ比較法学会の機関誌に受諾され、論文掲載が実現したのは1999年のことであった）。

こうした氏が推進しその内容を深化させてきた「法人」論研究から「会社統治」論研究、そしてさらには「信任関係 (Fiduciary Relationship)」論の研究に辿り着くなかで、アダム・スミス以来の「経済学という学問が、その理論体系から倫理を葬り去ることによって成立した学問であった」ことを岩井はあらためて反省的に回顧することとなる。そして「信任関係」論とそれを支える「忠実義務 (Duty of Loyalty)」—それはいわゆる「倫理」性の要求であり、イマヌエル・カントのいう「倫理」的義務に相当する一のもの—とみ方から、実際にはわれわれが生き暮らす「資本主義のまさに真つただ中に倫理がある」とも強調されることとなる。対等な人間関係を前提とする契約関係より、むしろ対等性をまったく欠いた非対称的な人間関係にもとづく「信任関係」は必然的に経済のなかに〈倫理性〉を復権させるのであり、新古典派が前提とする契約関係よりも、場合によってはより根源的な意味で重要な人間関係として信任関係を把握し直すことになる。そして岩井は、みずからの「信任関係（における倫理と法の関係）」をまさに完璧なまでに例示する格好のモデルとして「文楽（人間浄瑠璃）」をあげている。資本主義の新しい形のコアをなす信任関係論と日本の伝統芸能の形がきわめて有機的かつ体系的に結びつくものがあることを見出す岩井氏の発想力の幅に読者諸氏は驚かされるだろう。

こうして、自由放任主義思想というものに対して基本的な理論的基礎を与えうる主流派の新古典派経済学にとって岩井がその重要性を見出した「信任関係」はまさに「敵性語」にほかならず、『経済学の宇宙』第7章で氏は次のように指摘されている。「法と経済学」分野の代表的研究者は、「会社と経営者の信任関係を、株主と経営者との契約関係に還元することに躍起になっています。会社統治の問題を、自己利益追求を前提とするエージェンシー問題に還元し、アダム・スミスに忠実に、その中から倫理性としての忠実義務を排除しようとしているのです。その論理的かつ必然的帰結は、経営者報酬の高騰によるとりわけアメリカでの格差再拡大社会の招来である。以上についての一連の理論的内容を概説した岩井の最新論文「会社の新しい形を求めて—なぜミルトン・フリードマンは会社についてすべて間違えたのか」『一橋ビジネスレビュー』東洋経済新報社、2020年 WIN. (68巻3号)、8-28頁もあわせて参照されたい。

り、その当時の心境をきわめて率直かつ印象的に語っている（第6章）。「貨幣の存在問題はずっと考え続けてきました。その問題をやっと数学的に定式化できた論文によって、学界の世界に戻ることができたと思っていたのに、こんなことになってしまった。映画批評などを始めて、もう学術論文は書くのをやめようかとまで考えていました。そして『貨幣の進化』論文は、しばらくどこにも投稿せずにはあったらかしのしておいたのです」。氏の当該「貨幣の進化」論文は長い年月をへてようやく1996年に海外洋雑誌に掲載されるに至るが、本書に書き記されたそうした一連の文章を読んであらためて痛感するのは、そこにはたんなる学問への知的好奇心にとどまらない深い「学問愛」があるはずだということにほかならない。第1章で氏がこう述べていることもふたたび感慨深く想起される。「これだけ長く学者をやっていると、何が研究で何が研究ではないかという区別はほとんどなくなっています。よくも悪くも、二十四時間、学者をやっていると言っていいのかもしれませんが」。学者生粋の矜持といってよいが、氏の場合はそれが強い信念と学問的使命感・職業倫理にもとづき、最後には必ずや自分が見いだした研究テーマを「論文（日本語・英語）」という形で完成させ、独自の結論に到達している。岩井の学者としての矜持には、巨星と称する師宇沢弘文の影響もたえずあったはずである（岩井による「父離れ」と題する文章も参照）。

さて「経済学史の未来」という3つめの内容に論述を戻せば、岩井によれば、「経済学は倫理を葬った学問」であり、氏は「資本主義のまさに真つ只中に倫理がある」ことを発見したと主張し、その純粹なる「驚き」こそが現在の研究テーマの背後にあるようだ。「経済学史講義」プロットの最終章をなす直近の研究テーマ「言語・法・貨幣」論や人間科学としての「市民社会」論一氏のいういわゆる第三の科学としての人間科学が科学であるというるのは、「人間社会において物理的な実体性よりもはるかに強い実体性をもつ言語・法・貨幣のような社会的実在が存在しているから」である（岩井[2006] 166頁）—など、その着地点は標準的な「経済学史」講義とは大きく

異なり、いわば経済学（史）の未来を先駆けようとする含蓄に富んだ豊かな内容によって構成されている。講義プロットの第1章は「アリストテレスとポリスの経済学」となっているので、当該講義が対象とする歴史的時間の幅はいかほどであろうか。氏の「経済学史」講義が古典派以前の「重商主義」学説の意義の再発見に依っていることにも、特徴的かつ決定的な独自性がある。岩井は第8章で次のように明言している。「『見えざる手』の働きをその中核に据えたアダム・スミスとスミス以降の古典派経済学は、まさに『重商主義』が見いだした『貨幣の自己循環論法』と『利潤の差異原理』を抑圧することによって成立したのです」¹⁶。東大での講義ノートをもとに「経済学史」

¹⁶ 岩井は、まず〈経済学史〉という講義科目が「そもそもなぜ存在するのか」という問いに対する説得的な解答を見出そうとした。そして、これまでの主要な「経済学史」の教科書においては、1)「科学」としての経済学はアダム・スミスの1776年『国富論』の刊行によって誕生し、それ以降はほぼ単線的に発展してきた、2)アダム・スミス以前のいわゆる「重商主義」者による経済学的言説は、スミス『国富論』や重農主義者フランソワ・ケネー『経済表』による「科学」としての経済学の確立以前の取るに足らない幼稚で時論的な政策パンフレットにすぎない、という「2つの前提」が存在していたことをあらためて確認し、それらを大きく覆すテキストを再発見したという。そのテキストこそ、アリストテレスの『政治学』と重商主義者ジョン・ローによる『貨幣と商業』である。この二つの著書の経済理論・思想的意義については、『経済学の宇宙』とともに、『岩井克人「欲望の貨幣論」を語る』のなかでも詳述されている（ここでは、純粋なる市場経済がつらぬく自由放任主義的な資本主義とも、貨幣の廃棄と経済の中央計画化を標榜する社会主義とも決別しなければならないという岩井自身の結論をふまえ、「資本主義」をめぐる対立構造を内在的に深く吟味しながらそこから突き抜けていく。そして「貨幣をめぐる二律背反」の起源としてのアリストテレスへ氏は回帰するのである）。

上記の二つの著書のなかで、岩井が「人類史上最大の発見の一つ」として高く評価するアリストテレスが見出した洞察とは、「ポリスの思想家」としての透徹した思考そのものが、「貨幣の思想家」をこえて彼を「資本主義の思想家」へと導きながら、ポリスの存立の可能性を生み出す貨幣そのものがポリスそれ自体を崩壊させる可能性を生み出す契機になってしまうという逆説のことにほかならない。他者とともに善く生きるための「最高の共同体」であるポリスの発展は、モノを獲得する「手段」にすぎない貨幣そのものを「目的」として欲望する契機へ次第に転換させ、あらゆるモノを獲得できる〈可能性〉を与えてくれる貨幣への無限なる欲望（＝資本主義）に帰結していく。人間とはそのような〈可能性〉としての貨幣それ自体を無限に欲望できる存在だ（だからこそ、時代をはるかにすすめて、20世紀の「ケインズが流動性選好という言葉を使ったのは、ものすごいことで

の本をいつかまとめてみたいそうだが、その刊行を心待ちにしたい。もちろん唯一の「(岩井) 経済学史」だ。

マルクスの著作をいわゆる「テキスト」として仔細に読み直すことをつうじて、「資本主義とは何か」という問いをあらためて自問自答する必要性に直面したという岩井の「資本主義」をめぐる思考の導きの糸になったのが、ほかならぬシュンペーターのそれであった。資本主義という社会経済システ

す」、『資本主義から市民主義へ』2006年)。

ベルリンで2009年に開催された「貨幣ワークショック」でのリチャード・シーフォード教授の報告に大なる触発を受けながら、古代ギリシャが全面的な貨幣化による最初の「近代社会」であり、そのなかをアリストテレスが生き抜いたからこそ発見し偉大なる洞察となったことを確信しえた岩井氏。くわえてさらにアリストテレスには「残された二つの問題」が存在するとし、それらはジョン・ローとトーマス・マンという「重商主義」者によって、アダム・スミスの『国富論』よりはるか以前にともに理論的な解決が与えられていることを「発見」したとも主張されている。当該「残された二つの問題」に対する理論的解答が、ジョン・ローによる「貨幣の自己循環論法」とトーマス・マンによる、差異を媒介して利潤を生み出す方法としての「商業資本主義の基本原理解」に該当することはいうまでもない。古典派経済学から新古典派経済学ないしはマルクス経済学へ、新古典派経済学からケインズ経済学へという単線的で目的論的な「経済学史」講義と異なり、氏の「経済学史講義」プロットは、〈貨幣〉と〈資本主義〉をめぐる「重商主義」学説を新たに読み直すことをつうじて、「貨幣」を忘却し、「見えざる手」にもとづく市場経済(＝資本主義)の安定性を概して強調する主流派経済学の基本構造とは根源的に異なる理論・思想内容の全体像を俯瞰するものであるといえるだろう。すでに本文でも言及しておいたが、2008年のリーマン・ショック後、氏はいまこそ「自由放任主義の第二の終焉」(日本経済新聞朝刊他)が書かれねばならないと論じていたわけだが、これは公にむけた宣言であり、みずからへの新たな決意表明でもあったとってよいであろう。

なお追加的に述べておけば、経済学の未来を展望するためには経済学の歴史に対する深い理解が必要であることはいうまでもないが、「科学」という名のもとに経済学—とりわけアメリカ的な価値観によって構成された経済学—がその帝国主義的な拡大と影響力を顕著に増していることは憂慮すべき事態ではないか。なぜならばそれは、経済学を学ぶうえで欠かせない経済学説史や経済思想史というかつては「共有」されていた問題関心が失われていき、現存する経済学(主流派の新古典派経済学やその「拡張」型の経済学)のみが唯一正しい理論であるとの理解に帰結していくからである。社会科学としての経済学が本来的にも多様性を取り戻すことはいかにして可能であろうか。こうした論点をめぐる、堂目卓生氏と佐伯啓氏との対談「歴史と現在—経済学の展望」もぜひ一読されたい。『ひらく(3)』2020年、エイアンドエフ、80-98頁。

ムにおける「利潤」の発生メカニズムをあきらかにするというシュンペーター自身がその目的とみなしたテーマこそ「資本主義の純粋理論」を構築することにほかならず、シュンペーターの『経済発展の理論』（1911年）で提起された「革新＝イノベーション」の経済ヴィジョンを数学的に定式化したシュンペーター経済動学から、「差異が利潤を生み出す」という資本主義の基本原則をコアにもつ、まさに最も純粋なる資本主義としての「ポスト産業資本主義」論へと貫き流れる一連の水脈は、〈グローバル化の外見と本質〉という歴史的潮流をも明示的に組み込んだ雄大な大河のようにも映る（第4章・6章）。産業資本主義の時代に支配的な力をもっていたモノとしての機械制工場やカネこそが利潤の源泉であったところに「大変革」が生じ、産業資本主義からポスト産業資本主義への変容にともない、ポスト産業資本主義の時代においては「ヒトの創造力しか『差異』を意図的に創り出すことができない」のであり、「利潤の源泉が、機械制工場から、ヒトの能力や知識に大きく移行しつつある」。さらに岩井によれば、ポスト産業資本主義の時代では、「ヒトにとって最も価値があるものは『おカネで買えない何か』であるという『逆説』が起こってきている」のであり、ポスト産業資本主義は「おカネが支配力を失っていく時代」にはほかならないと説かれることとなる。現象そのものでなく、現象とその現象の背後で作用している基本原理とメカニズムの相互作用に主眼を置くとき、岩井の鋭意なる洞察の多くは、現象への一般的な理解とは正反対といってもよい結論をさまざまな主題について導き出している。氏をしぼしば特徴づけるころの〈逆説的〉思考の射程は広く、かつ懐が深い。

そうしたシュンペーター経済動学の研究は、氏がエール大学で書き上げた『不均衡動学』から帰国後に最初に着手したテーマであったが、ケインズ理論とヴィクセル理論との有機的統合をなす〈不均衡動学〉と〈シュンペーター経済動学〉の関係はあらためてどのように把握しうのだろうか。すでに本文と本稿の脚注でも詳述されたように、これまでの経済理論・思想史にお

いて、岩井氏は根源的に対立する「2つの資本主義論（＝資本主義観）」を析出していた。氏自身が支持する〈不均衡動学派的な資本主義論〉に依拠すれば、資本主義は「効率性と安定性の二律背反」をまさに「不都合な真実」として抱え込んでいるのであって、これは〈新古典派的な資本主義論〉と真っ向から対立している。

ケインズは、貨幣経済としての「資本主義の根源的な不安定性」を重要な主題としており、現実の資本主義経済がまがりなりにも一定の安定性を保持しうるのはさまざまな「不純物」の存在をつうじて、まさにヴィクセル的な不均衡累積過程の発現を抑制しているからであるというテーゼこそが、岩井の不均衡動学のコアメッセージのひとつであった。ケインズが深く洞察しえた「貨幣」は物々交換にともなう「欲望の二重の一致」という困難を解消し、経済の〈効率性〉をたしかに増進させうる。ただしだいに、単なる「手段」ないしは「媒介」でしかなかった貨幣そのものが「目的」へと逆転していき、人々が貨幣それ自体をあたかも商品（モノ）であるかのように欲望するというケインズのいう流動性選好（実体性＝実体的根拠のない単なる媒介であり、記号にすぎない貨幣それ自体への欲望であり、まさにそこには人々の貨幣をめぐる「無」から「有」への欲望が出現している）によって、アリストテレス『政治学』の「財獲得術」が示していた貨幣の無限増殖を求める経済活動としての資本主義が成立している。そしてそこでは、古典派や新古典派が想定するように、「派生物」としての貨幣は実体経済を覆うヴェールのようなものではもはやありえず、消費や生産・投資といった「実体」としての経済を「派生物」としての貨幣が支えているという意味で、本源性と派生性の二項対立がここでは反転しているのだ（岩井 [2006]）。氏によれば、元祖デリバティブこそ「貨幣」にほかならず、したがって、「実体経済の根源にまさにデリバティブがある」わけである。ケインズ自身が比喩的に述べているように、人々のこうしてまるで「月」を欲するかのような貨幣に対する「無限の欲望（＝貨幣愛）」が恒常的な有効需要不足（非自発的失業や生

産設備の慢性的遊休化)に帰結し、経済の〈不安定性〉を助長しうる要因にもなっており、それはグローバル化された現代の資本主義において深刻さをさらに増幅させている。まさに上記でいう効率性と安定性の二律背反にほかならない。

他方シュンペーターは、資本主義経済において新結合としての革新を遂行する担い手である企業家と革新のためのアイデアをもつが資金がない企業家にファイナンスする機能をもつ資本家(銀行家)こそ、まさに経済の均衡状態を破壊し変化を引き起こす力の源泉であるとし、企業家と銀行家との両輪による「革新=イノベーション」が生み出す「利潤」というものの本質的な不安定性に重要さを見出していた。企業家利潤をめぐる革新と模倣に随伴する発展と循環の相互作用のなかで変動していく資本主義的な経済機構そのもののなかに固有の不安定性の根源を洞察していたわけである。シュンペーターのいう「革新=イノベーション」とは岩井のいう「差異化(=他にない新しさ)―革新は実体的な側面での「無」から「有」の創造であり、くわえて氏は銀行による信用創造による金融的な側面における「無」から「有」の創造が生まれる側面をも強調しており、この2つの側面が合わせ鏡になっている―にほかならない。そして既述のように、資本主義とりわけ最も純粹なる資本主義としてのポスト産業資本主義においては、「差異の意識的な創造」こそが、その存続の宿命となっている。革新としてのイノベーションは経済発展の原動力であり経済の動的(効率性)を高めうるが、その過程で生み出される利潤そのものがきわめて不安定な存在である以上、資本主義システムはその〈不安定性〉から免れることはできない。ケインズ同様にこれもまさに効率性と安定性の二律背反にほかならない。このようにしてケインズ・ヴィクセル理論にもとづく〈不均衡動学〉と〈シュンペーター経済動学〉はともに有機的に連動しており、シュンペーター経済動学による資本主義論は、対立する「2つの資本主義論」のうち、新古典派的な資本主義論ではありえない(シュンペーター自身は経済学の基礎理論としてのワルラスの静

学的一般均衡理論を援用してはいるが)。

もう1点だけ指摘しておくならば(脚注14で述べた内容とも重複している)、岩井の「経済学史講義」プロットでは、その最終盤の「ヴィクセルと不均衡累積過程の理論」(第10章)、「ケインズと有効需要の原理」(第11章)に続いて、「古典派とマルクス派の利潤論と産業資本主義」(第12章)、「シュンペーターの利潤論とポスト産業資本主義」(第13章)という順序・位置づけがなされている。現代における「資本主義」をめぐるケインズとシュンペーターの経済理論・思想のいわば先駆的の原型として、「貨幣(の自己循環論法)」や「利潤(の差異原理)」についての「アリストテレスとポリスの経済学」(第1章)や「重商主義の貨幣理論」(第3章)、「中世の利潤論と重商主義の利潤論」(第4章)がすでに存在しているのであり、このような観点からみても、氏が初期の研究段階で集中的に挑み、そして理論的に再構築し、さらにいま現在もなおその現代的拡張に専心されているヴィクセルとケインズの有機的統合をなす〈不均衡動学〉と〈シュンペーター経済動学〉は、古典派以前から現代までの経済学説の全体像への理解を深めるうえでも決定的な重要性をもつ。氏のプロットにはいわゆる「経済学的思考」を突き抜ける経済学史が姿をみせているのだ。

*

わたくしは本学で「経済学史」や「社会思想史」など幾つかの講義と演習系科目を担当しているが、そのなかで氏の文献を教材として多く活用している。『岩井克人「欲望の貨幣論」を語る』は、講義用テキストとゼミ輪読文献として2020年度以降から指定している。やや難易度は高いが、経済学部ではない他学部の入門系講義科目のテキストとしても、本書はもつとも適しているもののひとつではないかと思っている。制度化・規格化された社会科学としての経済学において、ミクロ経済学やマクロ経済学のような初級、中級そして上級という学生のレベルに応じた「教科書」が数多く存在している

科目と違い、経済学史や社会思想史といった専門分野は講義内容にある程度の柔軟性と独自性を盛り込むことが可能であり、それは突き詰めれば、より広い観点と深い意味から「経済学とは何か」や「経済学における思想の役割」を再考し続けることが問われているということではないだろうか。

脚注16でも論及されたが、あらためて今一度、経済学説史や経済思想史というものへの関心を明確に共有していくことが必要であろう。そうした科目をつうじてこそ経済理論・思想の〈多様性〉を理解し、既存の学問的状况の全体像を俯瞰しながらかつ〈相対化〉することができるのであって、それは自分の考えを安易に正当化せず、むしろ自己の狭さを悟るための重要な契機ともなるにちがいない。岩井による、「経済学の専門家以外の人に向けて書いた最初のエッセイ」という「シュンペーター：遅れてきたマルクス」（「遅れてきたマルクス」として『ヴェニス商人の資本論』に所収）や『二十一世紀の資本主義論』に所収されている「マクロ経済学とは何か」、「無限性の経済学」、「ケインズとシュンペーター」¹⁷そして「資本主義『理念』の

¹⁷ この「ケインズとシュンペーター」という文章は1985年に発表されたかなり以前の作品群に該当するが、論述内容はけっして古くなっておらず、むしろ今日の「二十一世紀の資本主義論」をあらためて考え直す新鮮さを有している。「ケインズとシュンペーター」のなかで、岩井は以下のように総括している。すこし長くなるが、引用しておきたい。「創造的破壊を通して発展していく資本主義に固有の不安定性の根源に、それ自身何の実体的な要因にも還元できない〈差異〉の創造と消滅をめぐる個別企業同士の競争過程を見出したのがシュンペーターであった。他方、企業の設備投資の不安定性の根源に、本来は資本が生み出す利潤にたいする所有権の表象でしかなかった〈株式〉が〈商品〉化され投機の対象になったことを見だし、また貨幣経済そのものの本質的な不安定性の根源に、本来は商品と商品との交換を媒介する手段でしかない貨幣があたかもひとつの〈商品〉であるかのように保有されることによる実体部門と貨幣部門の相互干渉を見出したのがケインズであった。実体を欠いた差異そのものの商品化を基軸とする現代の資本主義—それは、まさにこのようなシュンペーターの世界とケインズの世界が融合した世界にほかならない。その意味で、わたしはまさにこの現代においてこそ、批判すべき点を多く見だしながらも、百年以上も前に生を受けたこの二人の経済学者の思考にたえず戻っていく必要を感じているのである」（205-206頁、強調は塚本による）。

なお岩井氏は、上記のわたくしの強調部分について、「今なら少し異なった書き方をするとと思います」といい、〈不均衡動学〉は資本主義の短期的・中期的理論、〈シュンペー

敗北」などは、短い紙幅でその当該主題の要諦を明快な筆致で論じた作品群だ¹⁸。そこには、標準的経済学の位相とは異なる氏独自の着眼点と上記の「教科書」を読むのとも異なる氏独自の再構成が打ち出されている。それを理解しながら同時に〈批評〉する力を身につけることで、経済学という学問への関心も大きく深まるだろう。何をどう読むかを明確に意識するのだ。

デジタル化が進む時代だからこそ、活字に触れ親しむことの重要さと大切さを想起するとき、いうまでもなく新聞記事では物足りない。世の中や経済についての日々の情報にとどまらず、学術的な知見とそれを導く経済学の基本原理や思想史的な視座を提供しなければならないからである。第8章で氏自身が言及しているように、岩井「経済学史」講義は、経済学の古典の原典テキストから重要箇所を抜粋した教材が配布され、それに解説を交えながら学生と一緒に読んでいくというスタイルがとられていた。教員と学生の双方

ター経済動学)はその長期的理論として位置づけ、私信をつうじて次のように再整理されていた。「流通によって無が有に転化し続けている貨幣が主軸となる資本主義の短期的側面と、無を有に転化させる信用創造+革新を原動力とする資本主義の長期的側面が通底している。現代資本主義はまさにこの『無から有』が短期においても長期においても極限化した状態だと考えられる」。

¹⁸ なおハイエク (Hayek) について岩井が論及している文章は決して多くないが、氏自身はハイエクからも大きな影響を受けているようである (岩井・島津 [1991])。それを象徴するハイエクの論文が「経済学と知識」(1937年)である。いわゆるミクロ的次元における個人の経済行動には、他人の行動に対する主観的な予想 (他人の行動に関するモデルから導かれる主観的な予想) が必然的に伴っており、それらの相互作用をつうじてマクロとしての全体の社会現象が形成されていくことになるが、それらの帰結が首尾一貫した整合性をもつか否かはアブリアリにはいいえず、経済的な不均衡を生み出す可能性を絶えず孕むこととなる。そして氏によれば、アダム・スミスの「見えざる手」というものに最終的には絶対的な信頼を寄せていたハイエクは、そうした経済のマクロ的不均衡や市場社会に内在する一定程度の安定性を保持するメカニズムについて徹底的に考え抜かなかったという。富士登頂でいえば8合目まではぎわめてハイエクに賛同できるが、残り2合目でハイエクは「見えざる手」への絶対的な信頼を前提としながら論理的に飛躍し、われわれを置き去りにしている。さらに氏によれば、8合目まではケインズとハイエクはぎわめて共通した社会観を有しているが、最後の2合目で分かれるとし、それ以降について氏はケインズに大きな影響を受けているという。こうして岩井氏の〈不均衡動学〉は、最終的には「ハイエク批判」の理論としても読むことができるのだ。

に力量が試されるが、すぐれて生産的で本格的な講義手法といえるだろう。あらかじめ分かりやすく別の日本語文章に置換されている概説書的なものを取り上げるならば、やはりそれは真の意味で活字というものに接したことはない。経済学という古典のテキストそのものに宿る時代性と生命力、そして経済学の偉人らの肉声を体感しなければならないはずだ。東京大学2004年冬学期に岩井克人先生の「経済学史」講義を実際に拝聴していたことが、現在のわたくし自身の講義姿勢にも活かされているとあってよい。

＊

日本を代表する世界的経済学者としての学問をめぐる格闘の軌跡を克明に描き出した岩井克人著『経済学の宇宙』には、格闘のいわば「代償」として患った病・身体的不調についても記述されており（法人論研究のために目を酷使したことで、左目の中心部分の視力を失う黄斑円孔という病気を患ったことなど。文庫版の「あとがき」でもその後の視力の状態について言及がある）、わたくしにはかえってそれが氏の人間的魅力を感じさせるものとして記憶に深く刻まれている。学者・研究者という職業が体力勝負であることなどは、岩井のような世界を舞台に活躍し続けている人間ならば百も承知のはずであり、氏は身体・精神へのケアと気遣いをたえず図りながら精力的に研究をおこなっているのだ。そして岩井のこれまでの研究のほとんどすべては年単位を要する中長期的時間軸のなかで遂行されてきており、そのためにはとりもなおさずきわめて粘り強い思索力・意志力・継続力が要請されうるといえよう。

学者としてよいときもあれば、むろんそうでないときもある。もしかすれば、どのような研究者にせよ、「そうでないとき」のほうが多いといえるのかもしれない。とはいえ、その「そうでないとき」には実は見出していたものが、意図せざる結果として、のちの研究に大きな意味と影響を及ぼすことがあるのもまた確かなところではないか。氏の場合でいえば、プリンストン大

学とベン大学における「日本経済論」講義をつうじての「法人」発見はその顕著な一例にほかならない。

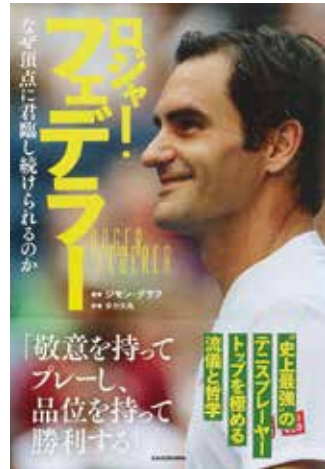
さらにくわえていえば、本書には岩井の伴侶である水村美苗氏についても比較的によくの記述がなされており、それらが本書に清々しく心地良い風味を与えてくれている。短い「あとがき」を読んでも、いかに氏がよき伴侶とめぐり逢い、長きに及ぶ人生をともに歩んできたのかがよく分かるにちがいない（たとえば「ヴェニス商人の資本論」という論考の基本的アイディアは水村美苗の「助け舟」によってもたらされたという）。このことは経済学をめぐる岩井の学問遍歴という本書の主題とは直接的な繋がりはないかもしれないが、最後にぜひとも強調しておきたい。本書は経済書だが、文学作品のように読者を引き込む筆力と魅力がある。情景と心理の描写がすこぶる鮮やかな次のような回想文はその一例だ。エール大学で7年かけて『不均衡動学』を完成させるに至った氏が、当時の経済学部長だった「トービンからテニユアは与えられないと告げられた日の夕刻、美苗と一緒に大学キャンパスを歩き回った記憶があります。そのとき、黄昏の中に墨絵のように立ち現れたスターリング記念図書館の建物は、いつにもまして壮麗でした」。

かつての氏の著書である『資本主義を語る』（1994年）。そこでの水村美苗氏との「対談」で岩井がこう述べていたことがいましきりに思い起こされる。「ぼくは大学院一年生のときに一本論文が書けて、ともかくそのおかげで、その後の『没落』の速度が遅くなった。瞬間風速でしかなかったけれど、アメリカでもっとも優秀な若手の数理経済学者になったからね」¹⁹。岩井が本書で意識的に用いる「頂点」と「没落」という独自の表現。それをめぐる数多くの濃密な知的ドラマが本書には凝縮されており、それはまさに「宇宙」的拡がりをもっている。そしてそれだけにとどまらない。本書『経済学の宇宙』は読者そのものの知的世界観をも拡げてくれるのであり、とりわけ

¹⁹ 岩井克人 [1994] 『資本主義を語る』第8章「帰ってきた人間」、299頁。

経済学の研究者ならば、本書が紡ぎ語り出す学問の世界への旅にともに誘われているような感覚に浸ることができるだろう。本書に付された「宇宙」という表現はけっして誇張ではなく、本書のもつ潜勢力を端的に表明している。

内橋克人氏は、「教育，医療，社会保障，農業……およそ人間の生存条件にかかわるテーマのすべてが宇沢弘文氏の宇宙である」（宇沢弘文・内橋克人『始まっている未来—新しい経済学は可能か』岩波書店，2009年，181頁）と述べていたが，研究テーマこそ違うにせよ，岩井氏による考察の拡がりや深さもまたそれに通じうるだろう。氏の研究精神の奥底に位置し続けている「宇沢問題」は今後いかなる意味をもつことになるのだろうか。「少なくとも無意識のレベルでは，学問の世界における予定調和を信じていない」と氏はいふ。だからこそ自分の研究について根気よく（英語）論文や書物，エッセイを書き続けていく（第8章）。みずからの「格闘」は負け続きの「格闘」ではあるが，負けが続いたにせよけっして断念せず「継続している」こと自体にこそ，自身の格闘の「特徴」があると氏は私信にて告げられた。再発見と再挑戦の日々は続くのだ（なおそのことは本稿の続編で扱う，テニス界のレジェンド選手であるロジャー・フェデラーにとっても同じであるにちがいない）²⁰。氏にとっていわばアル



²⁰ 2年ぶりの開催となった本年2021年のウィンブルドン選手権にて，オープン化以降最年長の39歳と337日で準々決勝に勝ち進んだフェデラーは，その試合での敗戦後も現役でのプレー続行を望んでいる。復帰までの長く険しくタフなりハビリをのりこえてふたたびウィンブルドンのセンターコートで5試合を戦い抜いたその雄姿を観衆とファンは大きな拍手喝采で讃えた。いわゆる「フェデラーの一瞬」を観ることを待ちわび，それが叶ったかのように。再発見と再挑戦を続けるためのエネルギーとモチベーションは残っており，

ファでありオメガでもある〈不均衡動学〉を現代的に改良した最新の研究動向—そこでは氏は明確なる目的をもって、あえて主流派である新ケインズ派経済学のマクロ理論モデルを下敷きにしている—について解説をおこなった『経済学の宇宙』の文庫版「補遺」をあらためて再読しながら、岩井氏のこれからの学問をめぐる新たな知的格闘を心待ちにしたい。そして「わたし」自身はこれからも何度も何度も本書を読み直すことになるにちがいない。

謝辞

前回の『経済論集』に寄稿した展望研究に引き続き、明石健五氏（株式会社読書人代表取締役社長/「週刊読書人」編集長）からは、本稿全体についての有益な示唆とコメントを頂戴することができた。ここに記して感謝申し上げたい。そこで氏は次のような的確な指摘をされている。後半の「岩井克人の学問論」について、「岩井克人というひとりの研究者の中には、先人がつくってきた学問の知見がほとんどすべて取り込まれており、岩井克人の本を読むことは、ただひとりの学者の綴った研究書を読むことではない。そうした学問の歴史と、また今現在の社会・世界を学ぶことであり、さらには未来を見通す眼力を鍛えることである」。

愛知大学経済学部に赴任後から10年以上に及び、岩井克人先生からは私生活でのやり取りをつうじて、学問的な内容についてこれまでにきわめてさまざまなことをご教示いただき、そうしたやり取りそのものが、わたくし自身の教育・研究や原稿執筆上における大きな励みになってきた。氏の著書を論じ直した今回の論説もお読みくださり、温かいお言葉とともに幾つかの疑問にも丁寧

また蘇ってくるだろうともフェデラーは語る。グランドスラム最多優勝タイの20回、ウィンブルドン最多優勝8回のレジェンド選手はつねに最高のプレーができるようたゆまぬ努力を重ね、そして謙虚に前を向いて目標を見定めているのだ。手術した両膝の状態の悪化で残念ながら東京五輪は欠場となり、本人自身も認めるように肉体的な衰えはたしかにあるが、フェデラーには並々ならぬ気高いテニス愛がある。ロジャー・フェデラーの自伝（脚注5参照）を書いたジモン・グラフ氏はその著作のなかでこう述べている。「昔ほど勝てなくなったフェデラーが、それでもテニスを続けている事実こそ、究極の純粋なテニスへの愛情の証明である」（186頁）。当該引用文のある第15章タイトルは「これが愛なのか（It must be love）」。

に返答された。本稿冒頭で言及したように、2020年度の本学図書館報への寄稿もありがたいものであった。氏がそこで語られたメッセージは愛大生に広く届けられるべきものであろう。こうした点につき最後尾ではあるが、あらためて深く感謝申し上げる次第である。

主な参考文献

- 岩井克人 [1994] 『資本主義を語る』講談社。
- 岩井克人 [1994] 『『父離れ』』（宇沢弘文著作集第Ⅰ巻『社会的共通資本と社会的費用』岩波書店、「月報Ⅰ（1-3頁）」として所収）。
- 岩井克人 [1985] 『ヴェニスの商人の資本論』筑摩書房。
- 岩井克人（聞き手＝三浦雅士）[2006] 『資本主義から市民主義へ』新書館。
- 岩井克人（聞き手＝前田裕之）[2015] 『経済学の宇宙』日本経済新聞出版社。
- 岩井克人他 [2019] 『資本主義と倫理—分断社会をこえて』東洋経済新報社。
- 岩井克人＋丸山俊一＋NHK「欲望の資本主義」制作班 [2020] 『岩井克人「欲望の貨幣論」を語る』東洋経済新報社。
- 岩井克人（聞き手＝前田裕之）[2021] 『経済学の宇宙』（日経ビジネス人文庫）日本経済新聞出版社。
- 青木昌彦編 [1977] 『経済体制論 第Ⅰ巻—経済学的基礎』東洋経済新報社（本書には「知識と経済不均衡」と題する岩井克人氏の論文が所収されている。当該論文はのちに『ヴェニスの商人の資本論』に再録された）。
- 青木昌彦 [2008] 『私の履歴書—人生越境ゲーム』日本経済新聞出版社。
- 宇沢弘文 [2000] 『社会的共通資本』岩波新書。
- 宇沢弘文 [2014] 『経済と人間の旅』日本経済新聞出版社。
- 現代思想 [1991] 『ハイエカー市場経済の論理』Vol. 19-12, 青土社（とりわけ本誌に所収されている, 討議：岩井克人・島津格「ルールを成立させるルール」, 36-54頁を参照）。
- 佐々木実 [2019] 『資本主義と闘った男—宇沢弘文と経済学の世界』講談社。
- 西部忠 [2014] 『貨幣という謎—金と日銀券とビットコイン』NHK出版新書。
- 日本経済新聞社編 [2021] 『逆境の資本主義—格差, 気候変動そしてコロナ……』日本経済新聞出版社。
- 山口周 [2017] 『知的戦闘力を高める独学の技法』ダイヤモンド社。
- 山口周 [2020] 『ビジネスの未来—エコノミーにヒューマニティを取り戻す』プレジデント社。

吉見俊哉 [2020] 『大学という理念 絶望のその先へ』 東京大学出版会。

吉見俊哉 [2021] 『大学は何処へ—未来への設計』 岩波新書。

なお参考文献のうち、青木 [2008]、宇沢 [2014]、佐々木 [2019]、および西部 [2014] の各書物には以前に書評を發表している。